

## 都市居住高齢者の社会関係の特質

### —友人関係の分析を中心として—

- 1 問題の所在および本稿の目的
- 2 概念および仮説の設定
- 3 都市居住高齢者の社会関係の概観
- 4 男性高齢者の友人関係分析
- 5 女性高齢者の友人関係分析
- 6 まとめと考察

浅川 達人\*  
高橋 勇悦\*\*

#### 要 約

本稿は大都市に居住している高齢者が持つ社会関係を、主に家族や親族以外との関係を対象として分析・考察することにより、都市居住高齢者の社会関係の特質を再検討することを目的とする。

まず「高齢者の主観的幸福感にとって、家族・親族以外との関係も大きな影響力をもっている」という第1仮説を検証することにより都市居住高齢者が持つ社会関係を概観した。その結果、男性では「親しい友人」が女性では「近所の人」および「親しい友人」が影響をおよぼし、それらの人との接触が「老いに対する態度」に影響をおよぼすことがわかった。このことから、大都市居住高齢者の社会関係は男女共に子供との関係を中心に縮小しているわけではないことがわかり、それはまた態度形成に影響をおよぼすものであることが示唆された。

次に、第1次的関係を社会的距離が近い関係として、第2次的関係を社会的距離が遠い関係として定義し、「第1次的関係と第2次的関係は並存している。そしてどちらが相対的に優位に立っているかは職業、収入、教育年数によってそれぞれ異なっている。」という第2仮説を検討した。その結果、第1次的関係と第2次的関係が主に職業および世帯収入の影響下で並存していることが示された。

さらに「職業は女性の社会関係に影響をおよぼしている。しかし、その影響は、男性と女性とでは異なっている」ことを第3仮説として、性別による社会関係の特質を検討した。50歳時に働いていた女性の社会関係を分析してみると、女性では男性ほど職業が大きな影響を及ぼしているわけではないことがわかった。ただし、友人関係における社会的距離については職業による差異がみられ、しかも男性とは異なった結果がみられた。

\*東京都立大学大学院博士課程

\*\*東京都立大学都市研究センター教授

## 1 問題の所在および本稿の目的

### 1. 1 都市における社会関係

都市における社会関係の特質についての議論は Simmel (1903 (1978)) の発想を基に Park (1916 (1978)) Wirth (1938 (1978)) らに始まり、さまざまな議論 (Axelrod, 1953 (1978); Wellman, 1979; Fischer, 1982) を経て現在に至っている。第2次的関係の相対的優越を強調する Park, Wirth らと、第1次的関係の存在を強調する批判者達との議論は、強調点にこそ差異があるものの本質的に対立しているわけではない。両者とも都市に多様な社会関係が存在していることを認めている点では一致していると考えられる。そのような多様な社会関係の中で、Park, Wirth らは第2次的関係の隆盛を強調し、批判者達は第1次的関係も存在することを強調しているに過ぎない。

このような強調点の差異が生じた原因のひとつは、Park (1916 (1978)); 1921 (1969)) Wirth (1938 (1978)) らが用いた「第1次的関係」「第2次的関係」という概念が多義的であり、多次元的な概念であったことが挙げられよう。批判者達はこれらの概念を検証に耐え得るレベルの概念に定義しなおして、検証を試みてきた。しかし、その過程は必ずしも適切であったとは言えず、第1次的関係の豊富さを強調するものの、第2次的関係の相対的優越自体を否定しきってはいない。このことから、「第1次的関係」「第2次的関係」をどのように定義し直し検証していくかが、きわめて重要かつ困難な問題であることがわかる。

また、強調点に差が生じたもうひとつの原因は、Park (1916 (1978)) Wirth (1938 (1978)) らが都市居住者の属性を考慮した詳細な理論形成を行ってこなかったことにある。それは彼らの研究の目的がその後の研究の指針作りにあったことに起因する。一方、批判者達 (Axelrod, 1953 (1978); Fischer, 1982) は属性の影響を考慮することにより Park, Wirth らの議論を精緻にする努力をしてきたと言えよう。

Park, Wirth らの都市における社会関係の理論とそれに対する批判の中で、都市における社会関係に対する重要な指摘がなされてきた現在、「第1次的関係」「第2次的関係」を検証に耐え得るレベルの概念に再度定義し直すこと、そして都市居住者の属性に留意して精緻に議論を進めていくことがまさに重要な課題となっているといえよう。

### 1. 2 高齢者と社会関係

高齢者は、新たな社会関係がほとんど形成されず、また既存の関係も消滅し始めている人々であると考えられてきた (Boissevain, 1974 (1986))。それ故に同居している家族との関係、配偶者が死別する可能性が高いことから特に子供との関係が重視され、「子供と同居することが日本の高齢者の幸せだ」ということが自明のこととされ高齢者の側も子供の側もそれを信じてきたように思われる (直井, 1990)。このような前提に立ち、さらに都市において Whith (1938 (1978)) が強調したように「家族の紐帯の弱化、家族の社会的意義の減少」が起きていることを前提として、都市における高齢者が問題的な状況におかれているという認知が生まれた。

近年これらの前提が疑問視されはじめ、高齢者の社会関係を子供以外との関係も含めたトータルな関係として捉える研究もなされるようになり (古谷野, 1983; 玉野他, 1989; 直井, 1990)、大都市居住高齢者では子供以外との社会関係が子供との社会関係以上に重要であるという指摘もなされるに至った (直井, 1990)。しかし、それらの議論においても、高齢者がそれまで送ってきた生活が彼・彼女らの社会関係に与える影響を十分考慮してきたとは必ずしもいえない。

従って、大都市に居住する高齢者の社会関係の特質を、彼・彼女らの生活経験が社会関係に及ぼす影響を考察することを通して描き出すことが現在必要となっていると考えられる。

これらの問題関心に基づいて、本稿では大都市に居住している高齢者が持つ社会関係を、主に家族や親族以外との関係を対象として分析・考察することにより、都市居住高齢者の社会関係の特質を

再検討することを目的とする。

## 2 概念および仮説の設定

### 2.1 概念設定

Park (1916) が用いた第1次的関係、第2次的関係という概念を、Park (1921 (1969)) に基づいてまとめてみる。彼は社会関係の基礎となる相互行為の第1段階、またその第2段階以降の準備として「接触」をまず想定した。さらにその接触を、親密で対面的な「第1次的接触」と、外面的で距離をおいた接触である「第2次的接触」の2つに分類している。そしてこのような第1次的接触をもとに取り結ばれた関係を第1次的関係とし、第2次的接触をもとに取り結ばれた関係を第2次的関係とした。この第1次的関係は、人間の本性 (human nature)<sup>[1]</sup> やパーソナリティを育む場であり、第1次的結合のなかでは人々はまさに生活の全ての点で他の人々と接触しており、一方第2次的結合の中では生活の中のほんのわずかの点でしか他の人々と接触していないと述べている。このような第2次的関係という概念はSimmel (1903 (1978)) の「社会関係における自制的な態度」という概念にその発想の基礎を見いだせる。

Simmel (1903 (1978)) は、大都市は常に「貨幣経済の中心地」であり、そこでは「外的内的刺激の急速で間断のない変化から生じる、神経刺激の強化」が起こっていると捉え、大都市居住者の心的現象は「飽きの態度」としてしている。なぜなら大都市居住者達の生活が「きわめて長期間にわたる神経の最も強烈な反応のために、神経を攪乱し、ついには神経が全然反応しなくなるから」であると考えた。そしてこの「飽きの態度」を身につけた人々は、社会関係においても「自制的な態度をとるようになる」と述べる。この自制的のひとつの結果として、例えば「多年の間隣人であった人をもみても知ることさえない」といったことがよく起こることを指摘している。

さらにSimmel (1903 (1978) : 105) は「人が自分の会うほとんど全ての人を知っており、また

ほとんど全ての人とも積極的な関係を結んでいる、その小さい町での内的諸反応と同様の多数の内的反応が、もし無数の人々との連続的な外的接触に対する反応であるとするならば、人は内的には完全に原子化されるであろうし、また想像もできないほどの心的状態に至るであろう。」と述べている。換言すれば、非常に多くの人々が暮らす都市において、その全ての人と自分の態度や行動様式、規範の形成に影響を及ぼすほど積極的に関係を結べば、心的に緊張が高まり不安定になる、そこで積極的に関係を結ぶ人とそうでない人を自らが選別して社会関係を形成していくようになると言い換えられよう。このような態度をSimmelは「自制的な態度」として述べていたと考えられる。つまり「自制的な態度」とは、相手との距離を自ら設定して社会関係を形成する態度であるといえよう。

このような態度を基に結ばれた関係は、自己の態度や行動様式、規範の形成に影響をおよぼさない程度に自制的に結んだ関係であり、社会的距離<sup>[2]</sup> が遠い関係であるといえる。したがってPark (1921 (1969)) が述べた「外面的で距離をおいた接触」を基に結ばれた第2次的関係とは、社会的距離が遠い関係であると考えられる。そこで本稿では「第2次的関係とは社会的距離が遠い関係である」と定義する。

これに対して、対1次的関係はPark (1921 (1969)) においては「人間の本性やパーソナリティを育む場」であると定義されていた。すなわち自己の態度や行動様式、規範の形成に影響をおよぼすほど積極的に結んだ関係であり、社会的距離が近い関係であるといえる。そこで本稿では「第1次的関係とは社会的距離が近い関係」であると定義する。

### 2.2 仮説の設定

高齢者は従来社会関係が縮小した存在である(Boissevain, 1974 (1986) : 102 - 103) と捉えられ、日本では子供との関係を中心に研究が進められてきた(藤崎, 1985)。これに対して大都市においては男性では友人関係の、女性では親族関係の重要性が指摘されており(直井, 1990)、都市居

住高齢者を子供との関係を中心に社会関係が縮小した存在であると想定することが適切ではないことが示唆されている。そこで「高齢者の主観的幸福感にとって、家族・親族以外との関係も大きな影響力をもっている」ことを第1仮説として、高齢者の社会関係を概観することを分析のはじめとする。

また都市における社会関係をめぐる議論は、Park, Wirthらは「第2次的関係の相対的優越」を強調し、批判者達は「第1次的関係の存在」を強調していたと整理できた。そしてこのような強調点の差異が生じた原因は、「第1次的関係」「第2次的関係」という概念自体が多義的であり多面的であったこと、およびPark, Wirthらが都市居住者の属性を考慮した詳細な理論形成を行ってこなかったことが挙げられた。前節において「第1次的関係」を「社会的距離が近い関係」、「第2次的関係」を「社会的距離が遠い関係」として定義しなおしたので、次にこれらの概念を用いて都市居住者の属性を考慮した上で仮説を設定することが必要となる。Axelrod (1953 (1978)) らの属性分析の議論の成果を取り入れて都市における社会関係についての仮説を設定すると、「第1次的関係と第2次的関係は並存している。そしてどちらが相対的に優位に立っているのかは職業、収入、教育年数によってそれぞれ異なっている。」とまとめることができよう。そこでこれを本稿における第2仮説とする。

「人は女に生まれえない。女になるのだ。」と Beauvoir (1949 (1978)) は述べた。また、M. Mead (1949 (1961)) は「どの社会でも、人類は、男女間の差異の最初の手がかりとなった、本来の生物学的な差異とはずっとかけ離れているような形態にまで、男女間の生物学的性をしばしば精巧に仕立てあげてきている。」と述べている。このような女性に関する研究の中で、性役割研究は「女性本来の役割とされてきた家族役割と職業役割の葛藤というテーマで展開してきた」といわれている(目黒, 1982 (1987))。また、岡村(1983)は「現在、婦人問題は生活のあらゆる領域において、それぞれの年齢層、所属する集団・階層により異なった様相をもってあらわれている。しかい

その根底にあるのは、婦人労働問題であるといつてよいだろう」とし、「婦人労働問題とは、おもに賃労働の場における男女差別の問題であり、より具体的には、雇用、労働条件、母性保護の問題が主要な論点となっている。」としている。

このように女性研究の主要なテーマのひとつとして職業が挙げられてきた。しかし、そこでの主要な論点は「家族役割と職業役割の葛藤」および「賃労働の場における男女差別の問題」であり、そのような論点の中では、女性にとって職業がどのような影響をおよぼした男性に対する影響とどのように異なっているのかという問題はあまり論じられてこなかったように思われる。全ての女性が家庭に専従していたわけではなく、多くの女性が労働者としての役割を果たしていたことを考えれば、職業が女性の社会関係を形成・維持していく上でも少なからぬ影響をおよぼし、その影響のおよぼし方が男性とは異なっていることも想像に難くない。例えばホワイトカラー職に就いていた男性とブルーカラー職に就いた男性の社会関係の差異が、女性でも同様に現れているわけではないであろう。そこで、「職業は女性の社会関係に影響をおよぼしている。しかし、その影響は、男性と女性とでは異なっている」ことを第3仮説として、職業の影響を中心として女性と男性での社会関係の差異を検討する。

以上3つの仮説を設定して、都市居住高齢者の社会関係の特質を東京都23区を対象として検討していく。

### 2. 3 調査概要の説明

本稿は東京都立大学都市研究センターが1991年5月に東京都23区に住む60歳以上75歳以下の方を対象に行った「大都市高齢社会の新しいライフスタイルに関する調査」<sup>3)</sup>のデータを用いて分析を進める。これらの人々の中から、選挙人名簿を基に無作為抽出法で7,000名の方々を選び、1991年5月に郵送法で調査を実施した。有効回収票数は4,607票で、回収率は60%強となった。

## 2. 4 性別による差異の概観

有効回収票4,607票中、男性は2,178票、女性は2,429票であった。男性と女性では生活に大きな差があることは想像に難くないが、実際には生活のどの部分にどの程度差異があるのでしょうか。配偶者有無、同居形態、50歳時あるいは現在の就業有無について男女別に比較することによって概観してみる。

現在配偶者がいる人は男性では91.6%であるが女性では58.0%であった。夫婦をみた場合夫の方が妻より高齢であることが多く、また男性より女性の方が平均寿命が長いことがこの比率に影響を及ぼしているといえよう。また、同様のことが同居形態にも反映されており、女性で18.3%、男性で5.2%が現在ひとりで暮らしている。また、就業状況をみても男性は50歳時で99.4%、現在でも72.4%が働いているのに対して、女性では50歳時で66.6%、現在では37.8%であった。女性の約7割が50歳時に働いていたことはかなり多い数字ではあるが、この年代の男性が戦争にとられることが多く女性が職業を持たなければならなかったことも多かったことを考慮するとうなずける結果ではある。総体的にみた場合、男性のほとんどが就業の経験があり女性では約7割であったことから、職業が持つ影響力は男女で大きく異なっていることが想像できる。このように男性と女性ではその生活が大きく異なっていることがデータによっても裏付けられた。

## 3 都市居住高齢者の社会関係の概観

### 3. 1 分析方法および変数の設定

高齢者は従来、社会関係が縮小した存在であり、子供との関係が中心となると想定されてきた。これに対して大都市においては男性では友人関係の、女性では親族関係の主観的幸福感に対する重要性が指摘されており(直井, 1990)、大都市居住高齢者を子供との関係を中心に社会関係が縮小した存在であると想定することが適切ではないことが示

唆されている。

そこで、大都市居住高齢者の主観的幸福感にとって子供以外との関係も影響力を持つか否かを重回帰分析によって検討する。

### 3. 2 被説明変数の設定

高齢者の主観的幸福感を測定する尺度には「カトナー・モラル尺度 (Kutner Morale Scale)」「生活満足度指標 (Life Satisfaction Index - A,B)」「PGCモラルスケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale)」「感情のバランス尺度 (Affect Balance Scale)」「満足度評点 (Satisfaction Rating)」「ムードの測定 (Mood Measure)」などさまざまな尺度が考案されている。これらの尺度の中で、「満足度評点」あるいは「ムード測定」はひとつの質問文によってそれぞれ満足度を測定する概略的なものであり、「感情のバランス尺度」は必ずしも高齢者に対する尺度として開発されたものではない、また「カトナー・モラルスケール」ではモラルを一次元の連続体と考えていたことから、PGCモラルスケールが最も代表的なスケールであるとされている(和田,1980; 古谷野他,1989)。

Lawton (1972) が開発したPGCモラルスケールは当初22項目であったが、Lawton (1975) においては17項目に改定された。そして、その17項目は因子分析によって3つの因子すなわち、「心理的動揺 (Agitation)」「孤独感・不満足感 (Lonely Dissatisfaction)」「老いに対する態度 (Attitudes toward own Aging)」に所属するとされている(古谷野他,1989) ことから、このPGCモラルスケールが多次元尺度であることがわかる。

そのため、高齢者の幸福感を多面的に測定するためには、PGCモラルスケールがきわめて有効なスケールであるといわれてきた。しかし幸福感とはそもそもきわめて多義的かつ多元的な感覚であり、その全てを網羅することは不可能であると思われる。PGCモラルスケールを用いての分析が数多くなされてきた現在、3因子の中のどの因子に何ほどの程度影響をおよぼしているのかを分析することが必要であると考えられる。

本稿では、人々の態度や行動様式、規範の形成に影響を及ぼすか否かで第1次的関係と第2次的関係を分類し定義した。そこで、PGCモラールスケールの3因子の中の「老いに対する態度」に関わる項目のみをモラールスケールとして採用する。このモラールスケールは広義には主観的幸福感を、狭義には態度を表すと操作的に定義する。そしてそこから算出したモラール得点を被説明変数として用い、社会関係が態度形成にどの程度影響をおよぼしているのかを検討する。なお、以後特に断りがない場合は、「老いに対する態度の得点」を「モラール得点」として表記する。

### 3. 3 モラール得点の全体像の把握

本稿では「老いに対する態度」に所属する5項目のうち、直井(1990)において「わからない」と答えた人の率が最も高かった<sup>4)</sup>「若いときと比

べて今の方が幸せだと思いますか」という項目を除外し、残りの4項目を採用した。各項目ごとの男女別集計を(表1)に示した。質問は「はい」と答えるとモラールが高いような質問と「いいえ」と答える方がモラールが高い質問とが混在しているので、(表1)では左側の選択肢がモラールが高い回答、右側の選択肢がモラールが低い回答となるように並べた。

Q1からQ3では老いを肯定的に捉える人と否定的に捉えている人はほぼ同程度であるのに対して、年をとるということが若いときに考えていたより良いとは思わない(Q4)人が7割もいる。このことから、生きることは厳しいことであり、老いは若いとき思っていたより悪いものであると感じるなど、「高齢者にとっての人生」というものに対してしっかりした覚悟があるという印象を受ける。

表1. モラール得点の各項目別集計 (%)

Q1.あなたは自分の人生は年をとるにしたがってだんだん悪くなってゆくと感じますか。

	いいえ	はい、わからない、無回答
男性	59.1	40.9
女性	64.9	35.1

Q2.あなたは現在、去年と同じくらい元気があると思っていますか。

	はい	いいえ、わからない、無回答
男性	60.7	39.3
女性	52.7	47.3

Q3.年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。

	いいえ	はい、わからない、無回答
男性	51.2	48.8
女性	53.3	46.7

Q4.年をとるということは若いときに考えていたより、よいと思いますか。悪いと思いますか。それとも同じだと思いますか。

	よい	悪い、同じ、無回答
男性	24.2	75.8
女性	22.4	77.6

### 3. 4 モラールスケールの妥当性

次に、ピアソンの積率相関係数を用いて各項目の相関関係を表し（表2）、今回作成したモラールスケールの妥当性を検討する。

ピアソンの積率相関係数を用いて各項目の相関関係について分析した結果、全てが互いに0.1%水準で有意に相関していることがわかった。すなわち、全てが同様の因子に属していることを示しており、

このモラールスケールが「老いに対する態度」を測定していると考えられる。従ってこのモラールスケールから算出したモラール得点を被説明変数とすることは妥当であると考えられる。

モラール得点の算出方法は、PGCモラールスケールを用いた他の研究と同様に、各質問毎にモラールが高い回答、すなわち（表1）で左側に並べた回答に○をつけた人を1点、他の回答に○をつけた人を0点として加算し得点を求めた。

表2 各項目の相関関係

—男性—

Correlations :	Q1	Q2	Q3	Q4
Q1	1.0000	.2990 **	.3560 **	.2702 **
Q2	.2990 **	1.0000	.4421 **	.2056 **
Q3	.3560 **	.4421 **	1.0000	.2132 **
Q4	.2702 **	.2056 **	.2132 **	1.0000
N of cases : 2178	1 - tailed Signif : *-.01 **-.001			

—女性—

Correlations :	Q1	Q2	Q3	Q4
Q1	1.0000	.3263 **	.3160 **	.2732 **
Q2	.3263 **	1.0000	.4249 **	.2395 **
Q3	.3160 **	.4249 **	1.0000	.2098 **
Q4	.2732 **	.2395 **	.2098 **	1.0000
N of cases : 2429	1 - tailed Signif : *-.01 **-.001			

### 3. 5 説明変数の設定

直井（1990）では健康状態、世帯収入、就業の有無、配偶者の有無、同居子の有無、親族交際得点<sup>[5]</sup>、友人交際得点<sup>[6]</sup>の7変数を説明変数として、分析がなされていた。本稿ではこれらの変数の他に、「就学期間」を説明変数に加えることにする。また、「親族交際得点」の代わりに「別居子との接触頻度」「兄弟姉妹との接触頻度」「親戚との接触頻度」を、「友人交際得点」の代わりに「近所の人との接触頻度」「親しい友人との接触頻度」を用い

ることにより、カテゴリーを細分化した。

これらの説明変数群を用い、他の変数をコントロールした中でどの変数がどの程度モラール得点に影響を及ぼしているかを、重回帰分析によって検討する。

### 3. 6 分析結果

男女別に重回帰分析におけるSTEPWISE法によりPIN5%で分析した結果から、標準偏回帰係数（ベータ）および重相関係数を（表3）に示す。

表3 モラル得点の重回帰分析(標準偏回帰係数)

-男性-						
	健康状態	世帯収入	配偶者有無	親しい友人	就学期間	重相関係数
	-.265	.149	-.095	.083	.070	.379
-女性-						
	健康状態	世帯収入	近所	親しい友人	重相関係数	
	-.279	.170	.088	.071	.365	

(表3)に示したように、男性では「健康状態」「世帯収入」「配偶者有無」「親しい友人との接触頻度」「就学期間」の5項目が、女性では「健康状態」「世帯収入」「近所の人との接触頻度」「親しい友人との接触頻度」の4項目が投入された。

男女共に健康状態、世帯収入、親しい友人との接触頻度が、他の変数の影響を除去してもモラル得点に対して有意な影響をおよぼしており、子供との同居および別居子との接触はモラル得点に対して有意な影響をおよぼしていないことがわかった。また、男性ではこれに配偶者有無と就学期間が加わり、女性では近所の人との接触頻度が加わる。

### 3.7 考察

これらの結果から、男女共に「親しい友人」という家族・親族以外の人との、「接触」という社会関係がモラル得点に影響をおよぼすことが示された。また、その中でも男性では「親しい友人」が女性では「近所の人」および「親しい友人」が影響をおよぼし、それらの人との接触が「老いに対する態度」に影響をおよぼすことがわかった。このことから、「人々の態度や行動様式、規範の形成に影響を及ぼす社会関係」としての第1次的関係が、家族・親族以外との社会関係においても存在していることが示唆されたといえよう。

このことから、大都市居住高齢者は男女共に子供との関係を中心に社会関係が縮小した存在であるわけではないことがわかり、その社会関係はまた態度形成に影響をおよぼすものであることも示唆された。そこで次に属性分析を行い、第1次的関係

と第2次的関係の並存に関する第2仮説の検証へと分析を進めていく。

## 4 男性高齢者の友人関係分析

前節において親しい友人との第1次的関係の存在が示唆された。そのような関係は誰にとっても同様に存在するのであろうか。第2仮説の検証を通してその点に関して考察を試みる。分析は男女別に行っていくが、本節では男性を扱い、女性は次節で扱うことにする。

### 4.1 分析枠組みおよび変数の設定

都市における社会関係をめぐる議論の整理および批判を通して設定した第2仮説は「第1次的関係と第2次的関係は並存している。そしてどちらが相対的に優位に立っているのかは職業、収入、教育年数によってそれぞれ異なっている」というものであった。この仮説の検証に先立ち、まず説明変数および被説明変数を設定し、次に分析枠組みについて述べていく。

高齢者の社会関係は現在までの生活のさまざまな場面而形成され維持されてきたものと考えられる。高齢者の多くが就学期・就業期を経て現在に至っていることを考えると、学生生活をどの程度の期間送り、またどのような職業生活を送ってきたかが社会関係の形成維持に対して、影響を及ぼすであろうことは想像に難くない。また地理的に遠く離れた友人との関係を形成・維持する上では、経済力が豊かである方が有利であろう。そこで、「就学期間」「世帯収入」「職業」の3変数の各々を説明



表4 世帯収入、就学期間、職業別モラル得点の概観（平均値）

男性の平均値 1.95

	Sig	Eta	平均値
世帯収入	***	.247	収入多 (2.32) > 収入中 (2.05) > 収入少 (1.53)
就学期間	***	.175	就学期間長 (2.16) > 就学期間中 (2.08) > 就学期間短 (1.65)
職業	***	.188	ホワイト (2.25) > グレー (1.91) > 自営 (1.83) > ブルー (1.63)
(P<.001 : ***)			

変数として設定する。

社会階層論の議論のなかでは、これらの3変数から推し量られる社会的地位を説明変数とする議論もある。確かにこれらの3変数は各々強く関連しており、社会的地位を示すともいえる。しかし、それらの影響が互いに打ち消し合う関係にある場合、社会的地位自体を分析してもそれらを見落とす危険性がある。そこで本稿では、各々の変数が社会関係にどのような影響をおよぼしているのかを個別に調べることにする。

職業の影響を考察していく場合、現職と最盛職のどちらを職業の指標として取り上げるかが問題となる。本節のテーマである友人関係を考察する上では、対象者の職業生活に最も影響を及ぼしてきたであろう最盛職を職業の指標として取り上げることが適切であると考えられる。最盛職の測定方法にも、最高位の役職についたときの職業を尋ねるなどさまざまな方法がある。自営業からパート、アルバイトまでを含めて分析する本節の場合、50歳時の職業として一律に測定する方法をとることが妥当である。

また、職業分類については、まず全体を自営業層と勤め人とに分け、勤め人のなかでは管理的職業を「ホワイトカラー層」、事務的職業を「グレーカラー層」、現業・技能職などを「ブルーカラー層」とした。なお自由業は勤め人とは異なるが、経営者の立場に立つことからホワイトカラー層に含めることにした。

一方被説明変数となる家族・親族以外との社会関係については、前節において社会関係の中では「親しい友人」との接触がモラル得点に強く影響を

及ぼしていることが示されたので「親しい友人」を取り上げることにする。すると、どのような人が「親しい友人」を保有し、またどのように配置しているのか。そして「親しい友人」とどの程度接触しており、また「親しい友人」とどのような社会的距離をとって社会関係を取り結んでいるのかが問題となってくる。従って、本節での被説明変数を「親しい友人の保有状況」「親しい友人の配置状況」「親しい友人との接触頻度」および「親しい友人との社会的距離」の4変数とする。

そしてこれらの変数を用いて、「就学期間」「世帯収入」「職業」と「親しい友人保有状況」「親しい友人の配置状況」「親しい友人との接触頻度」との関係进行分析することを通して、友人関係が全ての人にとって同様に結ばれているわけではないことを明らかにしていく。そして、「親しい友人との接触頻度」が「就学期間」「世帯収入」「職業」を媒介としてモラル得点にどのように影響をおよぼしているのかを分析することを通して、親しい友人との社会的距離を属性別に検討していく。

#### 4. 2 世帯収入、就学期間、職業別モラル得点

まず、世帯収入、就学期間、職業の各変数におけるモラル得点の平均値の差異を概観するために一元配置分散分析を行った。その結果を(表4)に示す。

その結果、全ての変数においてP<.001で有意な差がみられた。各変数における傾向をみると、就学期間が長い人の方が短い人より、世帯収入が多い人は少ない人より、ホワイトカラー層はブルーカラー層よりモラル得点が高いことがわかった。

それでは、就学期間、世帯収入、職業が友人関係に対してどのような影響を及ぼしているのであろうか、そしてそのような影響下で友人関係はモラル得点に対してどのような意味を持っているのであろうか。以下の節で分析していきたい。

#### 4. 3 世帯収入および就学期間別分析

##### (1) 親しい友人の保有状況

世帯収入および就学期間別に、親しい友人を持つ人と持たない人の比率を算出しその結果を(表5)に示した。なお、世帯収入をコントロールしたときの就学期間と親しい友人の有無との関連、およ

び就学期間をコントロールしたときの世帯収入との親しい友人の有無との関連をカイ自乗検定により検定し、その結果を前者は最下欄に後者は最右欄に示した。また、 $P < .05$ で有意な関連が見られた場合のみCramer's Vも併記した。

その結果、就学期間をコントロールした場合は世帯収入と親しい友人の有無の間に $P < .05$ で有意な関連が見られ、世帯収入が多い人の方が親しい友人の保有率が高かった。一方、世帯収入をコントロールした場合は就学期間と親しい友人の保有率の間に有意な関連はみられなかった。

表5 親しい友人の保有状況

Crosstabulation: 就学期間  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多		
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	
就学期間短	294 81.0	69 19.0	206 88.4	27 11.6	101 91.8	9 8.2	** .124
就学期間中	177 86.3	28 13.7	239 92.6	19 7.4	145 94.2	9 5.8	* .114
就学期間長	104 84.6	19 15.4	239 94.1	15 5.9	335 93.6	23 6.4	** .129
Column Total	575 83.2	116 16.8	684 91.8	61 8.2	581 93.4	41 6.6	

(註)  $P < .05$  \*  $P < .01$  \*\*  $P < .001$  \*\*\*, 下の数値はCramer's V

表6 親しい友人の配置状況

Crosstabulation : 就学期間  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多		
	近居	遠居	近居	遠居	近居	遠居	
就学期間短	177 60.2	117 39.8	133 64.6	73 35.4	75 74.3	26 25.7	* .104
就学期間中	96 54.2	81 45.8	126 52.7	113 47.3	86 59.3	59 40.7	
就学期間長	34 32.7	70 67.3	91 38.1	148 61.9	138 41.2	197 58.8	
Column Total	307 53.4	268 46.6	350 51.2	334 48.8	299 51.5	282 48.5	
		*** .202		*** .214		*** .258	

(註) P<.05 \* P<.01 \*\* P<.001 \*\*\*, 下の数値はCramer's V

## (2) 親しい友人の配置状況

次に親しい友人が、歩いて行き来できるところに住んでいるか否かについて分析する(表6)。以下、親しい友人が歩いて行き来できるところに住んでいると答えた人を「近居」、歩いて行き来できるところには住んでいないと答えた人を「遠居」と表記する。

世帯収入をコントロールした場合、就学期間と親しい友人の配置状況との間にP<.001で有意な関連がみられ、就学期間が中程度以下では近居率が遠居率より高く、就学期間の長い人は遠居率が近居率より高かった。一方、就学期間をコントロールした場合世帯収入と配置状況との間にP<.05で有意な関連がみられたのは就学期間が短い人のみであった。しかしそれらの人にとっても、収入が

多いほど遠居率が高くなるという傾向は見られず、逆に近居率が高くなる傾向が見られた。

## (3) 親しい友人との接触頻度

親しい友人を持つ人について、世帯収入および就学期間別にみた接触頻度について分析する(表7)。

各就学期間別に、世帯収入による接触頻度の平均値の差異を一元配置分散分析を用いて検定した結果、就学期間の全てのレベルにおいてP<.01で有意な差がみられた。そして就学期間をコントロールした場合、世帯収入が多い人の方が有意に接触頻度が多いことがわかる。これは(2)でみた通り世帯収入が多い方が近居率が高かったことを考え合わせると、地理的近接性が接触頻度を上昇させていると考えられる。

実際に、親しい友人が近くに住んでいる人と近く

表7 親しい友人との接触頻度 (平均値)

	収入少 接触頻度	収入中 接触頻度	収入多 接触頻度	SIG
就学期間短	3.80	4.07	4.37	**
就学期間中	3.85	3.46	3.85	**
就学期間長	3.21	3.39	3.76	***

(註) P<.001...\*\*\* P<.01...\*\*

に住んでいない人で接触頻度の平均値をとると、近くに住んでいる人が4.36、近くに住んでいない人が3.07であった。また、平均値の差の検定を行った結果、P<.001で有意であり、地理的近接性が接触頻度を上昇させていると結論できる。

(4) 社会的距離

最後に接触頻度とモラル得点の関係を分析することを通して、親しい友人との社会的距離について考察する。

世帯収入「少」「中」「多」と就学期間「短」「中」「長」の組合せで9個のケースをつくり、その各々のケースについて、各接触頻度におけるモラル得点を算出しグラフ化した。ただし、5人以下となった頻度についてはプロットせず除外した。その結果を [GRAPH 1] に示す。

9個のケースのうち、就学期間が長く世帯収入が中程度のケースおよび就学期間が中程度で世帯収入が多いケースを除くケースでは、程度の差こそあれ右上りのグラフとなっている。従って、自己

[ GRAPH 1 ]

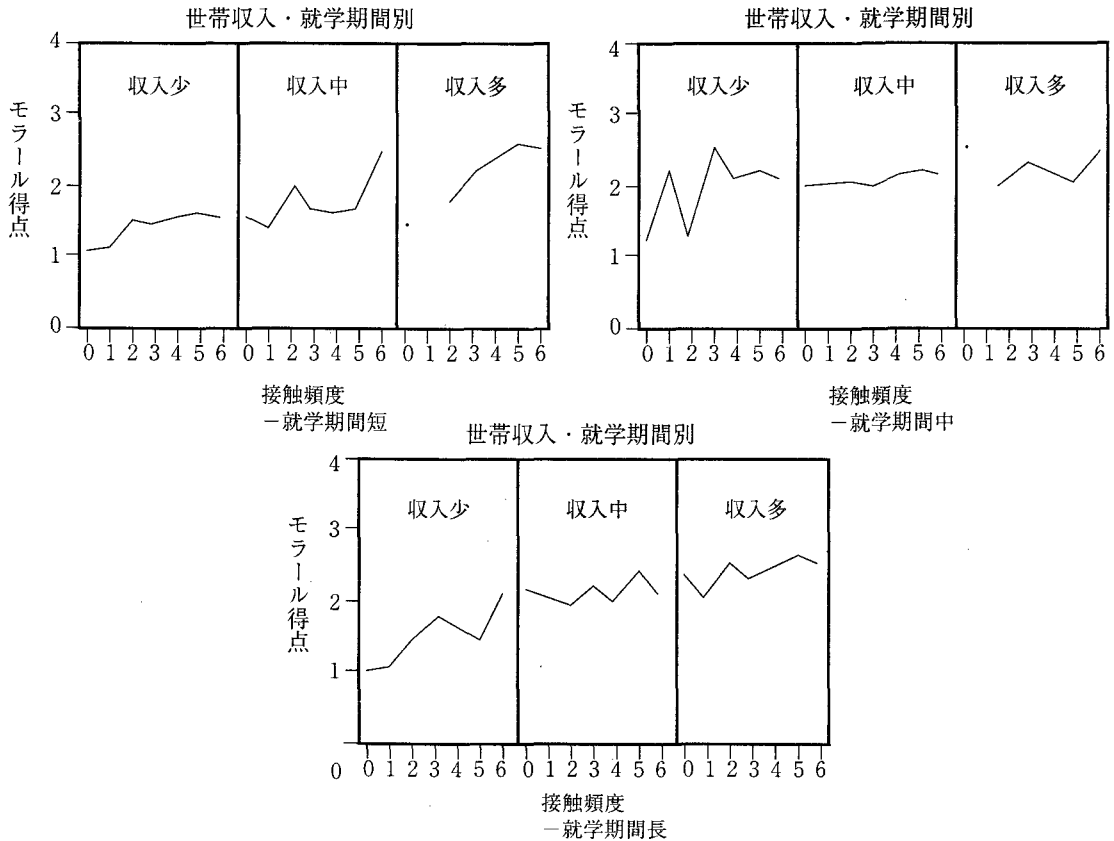


表8 親しい友人の保有状況

Crosstabulation : 職業  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多		
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	
自営業	141 85.5	24 14.5	180 92.3	15 7.7	106 91.4	10 8.6	
ホワイト	118 90.8	12 9.2	285 95.6	13 4.4	399 95.2	20 4.8	
グレー	96 82.1	21 17.9	117 92.1	10 7.9	40 90.9	4 9.1	* .147
ブルー	192 78.4	53 21.6	94 79.7	24 20.3	33 86.8	5 13.2	
Column Total	547 83.3	110 16.7	676 91.6	62 8.4	578 93.7	39 6.3	
		*		***			
		.124		.196			

(註) P<.05 \* P<.01 \*\* P<.001 \*\*\*

の態度や行動様式、規範の形成に影響をおよぼすほど積極的に結んだ社会関係、すなわち第1次の関係を結んでいる人が多いと考えられる。

#### 4. 4 世帯収入、職業、友人関係によるモラル得点の差異

##### (1) 親しい友人の保有状況 (表8)

世帯収入をコントロールした場合、中程度以下では職業と親しい友人の有無の間にP<.05で有意な関連がみられ、特にホワイトカラー層が親しい友人の保有率が高いことがわかった。

一方、職業をコントロールした場合はグレーカラー層で世帯収入と親しい友人の有無との間に有意な関連がみられ、世帯収入が中程度以上の人が親しい友人の保有率が高いことがわかった。

##### (2) 親しい友人の配置状況 (表9)

世帯収入をコントロールした場合、職業と配置状況の間にはP<.001で有意な関連がみられ、自営業層およびブルーカラー層では近居率の方が高くホワイトカラー層およびグレーカラー層では遠居率の方が高かった。

一方、職業別にみると世帯収入と配置状況には有意な関連が見られなかった。

##### (3) 親しい友人との接触頻度 (表10)

職業別に見ると自営業層が最も接触頻度が多いことがわかった。また、各職業別に世帯収入による接触頻度の差異を一元配置分散分析を用いて分析した結果、世帯収入によって接触頻度にP<.5で有意な差がみられたのは、ホワイトカラー層のみであった(P<.001)。ホワイトカラー層では世帯収入が多い人が特に頻繁に接触していることがわ

表9 親しい友人の配置状況

Crosstabulation : 職業  
 By 友人有無  
 Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多	
	近居	遠居	近居	遠居	近居	遠居
自営業	94 66.7	47 33.3	126 70.0	54 30.0	75 70.8	31 29.2
ホワイト	45 38.1	73 61.9	124 43.5	161 56.5	189 47.4	210 52.6
グレー	46 47.9	50 52.1	43 36.8	74 63.2	14 35.0	26 65.0
ブルー	105 54.7	87 45.3	53 56.4	41 43.6	20 60.6	13 39.4
Column Total	290 53.0	257 47.0	346 51.2	330 48.8	298 51.6	280 48.4
		*** .202		*** .252		*** .203

(註) P<.05\* P<.01\*\* P<.001\*\*\*

表10 親しい友人との接触頻度 (平均値)

	収入少 接触頻度	収入中 接触頻度	収入多 接触頻度	SIG
自営業	4.09	4.26	4.26	--
ホワイト	3.60	3.43	3.83	***
グレー	3.47	3.28	3.43	--
ブルー	3.58	3.45	3.94	--

(註) P<.001\*\*\* P<.01\*\*

[ GRAPH 2 ]

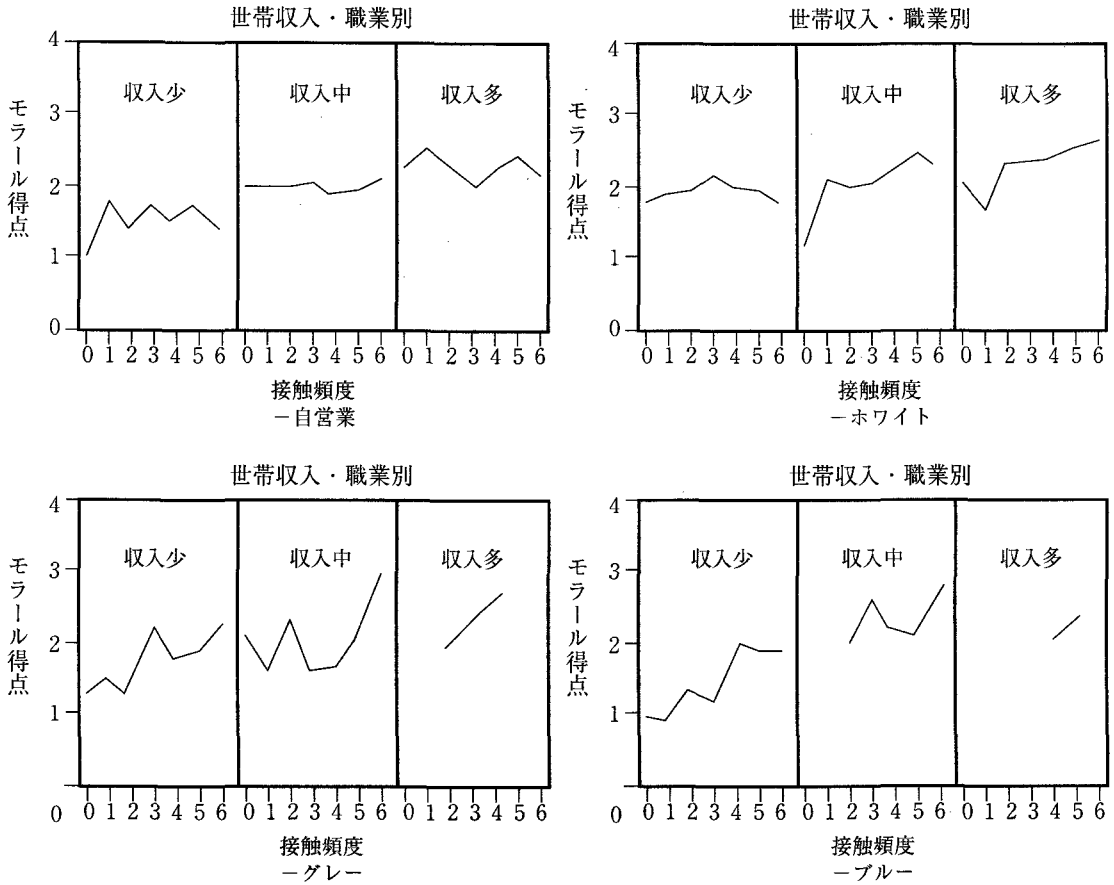


表11 グラフの分類

	世帯収入少	世帯収入中	世帯収入多
自営業層	C	C	B
ホワイトカラー層	B	A	A
グレーカラー層	A	D	☆
ブルーカラー層	A	D	☆

(注：☆は除外したケースが多く、傾向がわからなかったものを示す。)

かる。

(4) 社会的距離

世帯収入と職業の組合せで12個のケースをつくり、その各々のケースについて各接触頻度におけるモラル得点を算出しグラフ化した。ただし5人以下となった頻度についてはグラフにプロットせず除外した。その結果を [GRAPH 2] に示す。

12個のケースは、グラフの波形の特徴から大別すると「A：右上りのグラフを示すケース」「B：右下がりのグラフを示すケース」、そして「C：両変数間に関係がみられないケース」「D：AからCのどれにも分類できないケース」に4分される。この4種類のグラフによって、12のケースを分類すると(表11)のように分類できる。

接触頻度によりモラル得点に変化がみられたA,Bは自己の態度や行動様式、規範の形成に影響をおよぼすほど積極的に結んだ社会関係すなわち第1次の関係を結ぶ人が多く、変化がみられなかったCは第2次の関係を結ぶ人が多いと解釈できる。すると、自営業層は第2次の関係を結ぶ人が多く、第1次の関係を結ぶ人でも親しい友人と接触することが老いに対する態度を否定的にする傾向があることがわかった。また、ホワイトカラー層では第1次の関係を結ぶ人が多く、親しい友人と接触することが老いに対する態度を肯定的にする傾向があるものの、世帯収入が少ないケースでは否定的にする傾向があることがわかった。

#### 4. 5 第2仮説に対する分析結果のまとめ

本節では、「第1次の関係と第2次の関係は並存している。そしてどちらかが相対的に優位に立っているのかは職業、収入、教育年数によってそれぞれ異なっている」という第2仮説に対する検証を目的として、まず、「世帯収入」「就学期間」「職業」の3変数を説明変数として、親しい友人の「保有状況」「配置状況」「接触頻度」にどのような差異が生じるのかを分析した。

その結果、親しい友人を多く保有しているのは、世帯収入が多い人およびホワイトカラー層であった。また、親しい友人の遠居率の方が高かったのは、就学期間が長い人、ホワイトカラー層、グレーカラー層であった。これらのケースのなかで、グレーカラー層を除くと世帯収入が多くなるにしたがって、近くに住んでいる人の比率は高くなる。これらの結果から、「親しい友人との関係」でみた場合友人関係は、大都市居住男性高齢者の全てが同様に持つものではないことがわかった。親しい友人との社会関係は、友人関係形成の場のひとつである学生生活の長さ、人生の大半を費やしてきた職業生活、そして経済的余裕によって制限された上で保有されていると結論づけることができよう。

次に、「親しい友人との接触頻度」を説明変数、「世帯収入」「就学期間」「職業」の3変数を媒介変数、「モラル得点」を被説明変数と設定することによって、親しい友人との社会的距離および接触

することがモラル得点に対しておよぼす影響の差異を分析した。

その結果、第1次の関係と第2次の関係が並存していることが示唆された。前節において、社会関係の中でモラル得点に対して最も大きな影響力を持つことがわかった親しい友人との接触頻度を用いて分析したにも関わらず、特に自営業層では両変数間に関連がみられないことが多かった。すなわち自営業主・家族従業員は親しい友人を地理的に近くに持つことが多いにも関わらず、社会的距離を速く保ちながら接触しており、彼らを見ると第2次の関係の方が優位にたっていることがわかる。それに対してホワイトカラー層では第1次の関係が優位であり、親しい友人との接触が老いに対する態度を肯定的なものにする人が多いことが窺える。

## 5 女性高齢者の友人関係分析

次に「職業は女性の社会関係に影響をおよぼしている。しかし、その影響は、男性と女性とは異なっている」という第3仮説の検証を通して、職業の影響を中心として女性高齢者と男性高齢者での社会関係の特質の差異を検討する。

男性の社会関係の特質と女性の社会関係の特質を比較するためには、男性の分析と同様の分析を行い、比較しつつ分析を進めることが必要であろう。そこで同様の分析を用いた比較を通して第3仮説を検討していきたい。

### 5. 1 変数の設定および分析枠組み

男性と同様にまず、「就学期間」「世帯収入」「職業」の3変数を説明変数とし、「親しい友人の保有状況」「親しい友人の配置状況」「親しい友人との接触頻度」の3変数を被説明変数として、諸属性が社会関係の形成・維持にどのような影響をおよぼしているのかを考察する。次に、「親しい友人との接触頻度」を説明変数、「就学期間」「世帯収入」「職業」を媒介変数、「モラル得点」を被説明変数として、親しい友人との社会的距離を諸属性別に分析する。



表12 世帯収入、就学期間、職業別モラル得点の概観（平均値）

女性の平均値 1.9

	Sig	Eta	平均値
世帯収入	***	.198	収入多 (2.27) > 収入中 (2.19) > 収入少 (1.71)
就学期間	**	.067	就学期間長 (2.11) > 就学期間中 (1.99) > 就学期間短 (1.85)
職業	**	.091	ホワイト (2.17) > グレー (1.96) > 自営 (1.95) > ブルー (1.79)

(P<.001 : \*\*\* P<.01 : \*\*)

表13 親しい友人の保有状況 (%)

Crosstabulation : 就学期間  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし
就学期間短	390	44	198	18	100	14
	89.9	10.1	91.7	8.3	87.7	12.3
就学期間中	430	30	309	13	243	21
	93.5	6.5	96.0	4.0	92.0	8.0
就学期間長	64	6	71	4	87	1
	91.4	8.6	94.3	5.7	98.9	1.1
Column Total	884	80	578	35	430	36
	91.7	8.3	94.3	5.7	92.3	7.7
					*	
					.137	

(註) P<.05 \* P<.01 \*\* P<.001 \*\*\*

5. 2 世帯収入、就学期間、職業別モラル得点

まず、就学期間、世帯収入、職業の各変数におけるモラル得点の平均値の差異を概観するために一元配置分散分析を行った（表12）。

その結果、全ての変数においてP<.01で有意な差がみられた。各変数における傾向をみると、就学期間が長い人の方が短い人より、世帯収入が多い人は少ない人より、ホワイトカラー層はブルー

カラー層よりモラル得点が高いことがわかった。

それでは、就学期間、世帯収入、職業が友人関係に対してどのような影響を及ぼしているのであろうか、そしてそのような影響下で友人関係はモラル得点に対してどのような意味をもっているのであろうか。

5. 3 世帯収入および就学期間別分析

(1) 親しい友人の保有状況（表13）

表14 親しい友人の配置状況 (%)

Crosstabulation : 就学期間  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多	
	近居	遠居	近居	遠居	近居	遠居
就学期間短	316 81.0	74 19.0	162 81.8	36 18.2	78 78.0	22 22.0
就学期間中	289 67.2	141 32.8	216 69.9	93 30.1	162 66.7	81 33.3
就学期間長	38 59.4	26 40.6	43 60.6	28 39.4	59 67.8	28 32.2
Column Total	643 72.7	241 27.3	421 72.8	157 27.2	299 69.5	131 30.5
		*** .171		*** .160		

(註) P<.05 \* P<.01 \*\* P<.001 \*\*\*

表15 親しい友人との接触頻度 (平均値)

	収入少 接触頻度	収入中 接触頻度	収入多 接触頻度	SIG
就学期間短	4.46	4.59	4.47	--
就学期間中	4.28	4.13	4.29	--
就学期間長	4.08	3.91	4.00	--

(註) P<.001...\*\*\* P<.01...\*\*

世帯収入でコントロールした場合、世帯収入が多い人のみ就学期間と親しい友人の保有状況との間にP<.05で有意な関連がみられ、就学期間が長い人ほど親しい友人を保有している人の割合が高かった。

## (2) 親しい友人の配置状況 (表14)

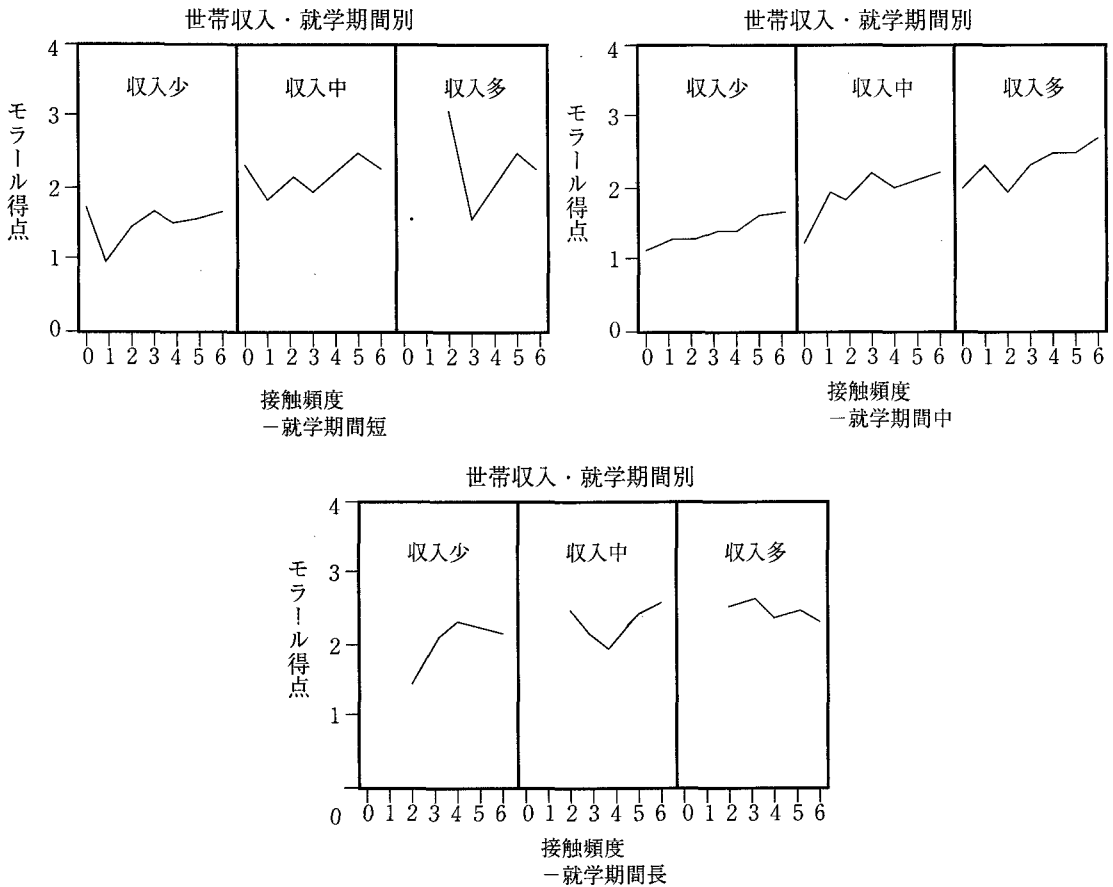
世帯収入でコントロールした場合、世帯収入が中程度以下の人では就学期間と親しい友人の配置状

況にP<.001で有意な関連がみられた。就学期間が長い人ほど遠居率が高くなるものの、男性と異なり就学期間が長い人でも近居率の方が高い。

## (3) 親しい友人との接触頻度 (表15)

就学期間別にみると、世帯収入のどのレベルでも就学期間が短いほど接触頻度が多い。また就学期間別に世帯収入による頻度の差を一元配置分散分析によって検定した結果、どのレベルでも世帯収

[ GRAPH 3 ]



入により接触頻度に  $P < .05$  で有意な差はみられなかった。

女性は男性と比較して親しい友人を近くに保有していることが多いため、接触頻度の平均値は男性よりも総じて多い。また、男性は就学期間をコントロールした場合世帯収入の多い人が接触頻度が多かったのに対して、女性ではそのような関係はみられなかった。

#### (4) 社会的距離

最後に接触頻度とモラール得点の関係を分析することを通して、親しい友人との社会的距離について考察する。

世帯収入「少」「中」「多」と就学期間「短」「中」「長」の組合せで9個のケースをつくり、その各々のケースについて、各接触頻度におけるモラール

得点を算出しグラフ化した。ただし、5人以下となった頻度についてはプロットせず除外した。その結果を [GRAPH 3] に示す。

就学期間の短い人と中程度の人とはほぼ右上りのグラフを示した。しかし就学期間の長い人では世帯収入が少ない人は右上りのグラフを示したのに対して、世帯収入が多い人は右下がりのグラフを示した。

#### 5. 4 世帯収入および職業別分析

50歳時に働いていた女性は、全体の66.6%であった。彼女達の社会関係にとって職業はどのような影響を及ぼしているのであろうか。その影響は男性とどのように異なっているのであろうか。本節では、50歳時に働いていた女性を対象として男

表16 親しい友人の保有状況 (%)

Crosstabulation : 職業  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多	
	あり	なし	あり	なし	あり	なし
自営業	175 91.6	16 8.4	138 93.2	10 6.8	108 93.9	7 6.1
ホワイト	58 100.0		46 97.9	1 2.1	56 88.9	7 11.1
グレー	140 94.6	8 5.4	83 97.6	2 2.4	34 87.2	5 12.8
ブルー	232 91.0	23 9.0	81 88.0	11 12.0	37 94.9	2 5.1
Column Total	605 92.8	47 7.2	348 93.5	24 6.5	235 91.8	21 8.2

(註) P<.05 \* P<.01 \*\* P<.001 \*\*\*

性との比較を念頭におきながら、職業が社会関係におよぼす影響を考察していきたい。

#### (1) 親しい友人の保有状況 (表16)

職業をコントロールした場合でも世帯収入をコントロールした場合でも、世帯収入や職業と親しい友人の保有率との間に有意な関連は見られなかった。ほとんど全ての人が親しい友人をもっと認知しており、職業・世帯収入による差はほとんどないと考えられよう。

#### (2) 親しい友人の配置状況 (表17)

男性とは異なり、ホワイトカラー層でも近居率の方が高かった。また、グレーカラー層では世帯収入と親しい友人の配置状況の間にP<.05で有意な関連がみられ、世帯収入が中程度以下では近居率

の方が高いのに対して、世帯収入が多いケースでは遠居率の方が高かった。

また、男性では自営業層とホワイトカラー層では世帯収入が多いの方が近居率が高くなるのに対して、女性では職業に関わらず世帯収入が多い人が遠居率が最も高くなることがわかった。

#### (3) 親しい友人との接触頻度 (表18)

ホワイトカラー層でも、男性とは異なり収入が多い方が接触頻度が多いといった傾向はみられなかった。また、男性ではブルーカラー層の接触頻度が世帯収入別にみても総じて少なかったが、女性の場合は最も高頻度であった。

#### (4) 社会的距離

世帯収入と職業の組合せで12個のケースをつく

表17 親しい友人の配置状況 (%)

Crosstabulation : 職業  
By 友人有無  
Controlling for 世帯収入

Count Row Pct	世帯収入少		世帯収入中		世帯収入多	
	近居	遠居	近居	遠居	近居	遠居
自営業	134 76.6	41 23.4	107 77.5	31 22.5	78 72.2	30 27.8
ホワイト	38 65.5	20 34.5	31 67.4	15 32.6	34 60.7	22 39.3
グレー	98 70.0	42 30.0	52 62.7	31 37.3	16 47.1	18 52.9
ブルー	176 75.9	56 24.1	61 75.3	20 24.7	25 67.6	12 32.4
Column Total	446 73.7	159 26.3	251 72.1	97 27.9	153 65.1	82 34.9
					*	.183

(註) P < .05 \* P < .01 \*\* P < .001 \*\*\*

表18 親しい友人との接触頻度 (平均値)

	収入少 接触頻度	収入中 接触頻度	収入多 接触頻度	SIG
自営業	4.31	4.38	4.06	--
ホワイト	4.34	4.09	4.20	--
グレー	4.23	4.16	4.32	--
ブルー	4.50	4.54	4.44	--

[ GRAPH 4 ]

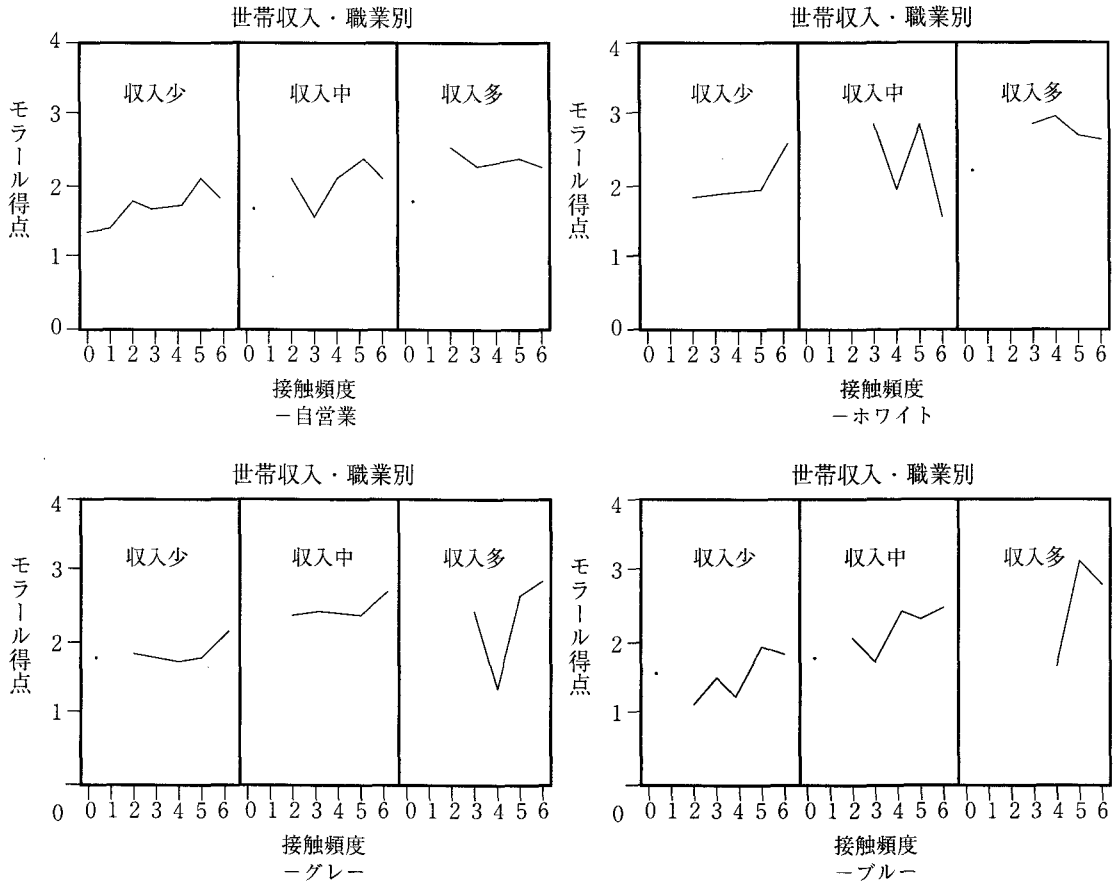


表19 グラフの分類

	収入少	収入中	収入多
自営業層	A	D	C
ホワイトカラー層	A	B	B
グレーカラー層	C	C	A
ブルーカラー層	A	A	☆

(註：☆は除外したケースが多く、傾向がわからなかったものを示す。)

り、その各々のケースについて各接触頻度におけるモラル得点を算出しグラフ化した。ただし5人以下となった頻度についてはグラフにプロットせず除外した。その結果を [GRAPH 4] に示す。

12個のケースを、男性と同様にグラフの波形の特徴から大別し、整理し (表19) に示す。

この表から、グレーカラー層では、第2次的関係を結ぶ人が多く、ホワイトカラー層およびブルー

カラー層では第1次的関係を結ぶ人が多いことがわかる。男性では第2次的関係が優越していた自営業層は、女性ではそうとはいえない。男性では第1次的関係を結ぶ人が多かったホワイトカラー層は、女性でも同様に第1次的関係を結ぶ人が多かった。ただし親しい友人と会うことによりモラルが低くなる場合が多い。

## 5. 5 女性高齢者における友人関係のまとめ

以上のFindingsを整理し、大都市居住女性高齢者の友人関係をまとめる。

親しい友人の保有状況については、男性ほど就学期間や世帯収入、職業の影響を受けてはおらず、ほとんど全ての人が親しい友人を保有していると考えられる。

一方、親しい友人の配置状況については、男性ではホワイトカラー層およびグレーカラー層において遠居率が近居率よりも高かったのに対して、女性ではグレーカラー層で世帯収入が多い人を除けばいずれも近居率が遠居率よりも高かった。また、就学期間別にみると世帯収入が中程度以下では就学期間が短い人が特に近居率が高かった。

接触頻度については、男性では世帯収入および就学期間別にみた場合世帯収入が多くなるにつれて接触頻度も高くなる傾向がみられたのに対して、女性では世帯収入別に接触頻度に有意な差はみられなかった。

社会的距離については、男性では自営業層では第2次的関係が優位であり、ホワイトカラー層では第1次的関係が優位であった。それに対して女性では第2次的関係が優位であったのはグレーカラー層であり、第1次的関係が優位であったのはホワイトカラー層およびブルーカラー層であった。

## 5.6 第3仮説に対する分析結果のまとめ

このように50歳時に働いていた女性の社会関係を分析してみると、女性では男性ほど職業が大きな影響をおよぼしているわけではないことがわかった。ただし、友人関係における社会的距離については職業による差異がみられ、しかも男性とは異なった結果がみられた。

男性では、自営業層は第2次的関係を結ぶことが多く、ホワイトカラー層は第1次的関係を結ぶ人が多い。一方女性では、第2次的関係を結ぶことが多いのはグレーカラー層であり、第1次的関係を結ぶことが多いのはホワイトカラー層およびブルーカラー層であった。

## 6 まとめと考察

### 6. 1 各仮説に対する分析結果のまとめ

本稿では都市居住高齢者の社会関係の特質を描き出すために、まず「高齢者の主観的幸福感にとって、家族・親族以外との関係も大きな影響力をもっている」という第1仮説を検証することにより都市居住高齢者が持つ社会関係を概観した。その結果、男女共に「親しい友人」という家族・親族以外の人との、「接触」という社会関係がモラル得点に影響をおよぼすことが示された。また、その中でも男性では「親しい友人」が女性では「近所の人」および「親しい友人」が影響をおよぼし、それらの人との接触が「老いに対する態度」に影響をおよぼすことがわかった。このことから、大都市居住高齢者は男女共に子供との関係を中心に社会関係が縮小した存在であるわけではないことがわかり、その社会関係はまた態度形成に影響をおよぼすものであることも示唆された。

次に、第1次的関係を社会的距離が近い関係として、第2次的関係を社会的距離が遠い関係として定義し、「第1次的関係と第2次的関係は並存している。そしてどちらが相対的に優位に立っているのかは職業、収入、教育年数によってそれぞれ異なっている。」という第2仮説を検討した。その結果、第1次的関係と第2次的関係が主に職業および世帯収入の影響下で並存していることが示された。

さらに「職業は女性の社会関係に影響をおよぼしている。しかし、その影響は、男性と女性とでは異なっている」ことを第3仮説として、性別による社会関係の特質を検討した。50歳時に働いていた女性の社会関係を分析してみると、女性では男性ほど職業が大きな影響をおよぼしているわけではないことがわかった。ただし、友人関係における社会的距離については職業による差異がみられ、しかも男性とは異なった結果がみられた。

## 6. 2 大都市居住男性高齢者の社会関係

約9割の人が親しい友人がいると認知しており、なかでもホワイトカラー層ではその保有率が最も高い。さらにこの層では近隣という範囲を超えて友人関係を保持している人が多い。このことから、この層では学友や仕事仲間といった必ずしも近隣に居住しているとは限らない人の中に親しい友人を見いだしているのであろうことが推測される。ただし、経済的に余裕を持つことが多い世帯収入の多い人の方が親しい友人を近隣に保有することが多くなることから、経済的余裕が近隣志向をもたらす可能性が示唆される。またホワイトカラー層では親しい友人との接触は、狭義には態度形成に広義には主観的幸福感に影響をおよぼしており、第1次的関係を結んでいるといえる。

一方、自営業層では親しい友人の近居率が高く、近隣の中で友人関係を保持する傾向がある。しかし、その友人との接触はモラルに対してあまり影響をおよぼしていないことから、第2次的関係を結ぶ人が多いと考えられる。

## 6. 3 大都市居住女性高齢者の社会関係

女性高齢者は、男性ほど就学期間や世帯収入・職業の影響を受けておらず、ほとんど全ての人々が親しい友人を保有しており、中でもおもに近隣の中で友人関係を築いている傾向がある。ただし、友人関係における社会的距離については職業による差異がみられ、しかも男性とは異なりホワイトカラー層では第1次的関係が多かったものの、グレーカラー層では第2次的関係が多かった。

ホワイトカラー層では、世帯収入が少ない人では頻繁に接触している人の方がモラルが高く、一方世帯収入が中程度以上の人ではあまり接触しない人の方がモラルが高かった。後者はあまり頻繁には接触しないような遠くに居住する親しい友人と接触している人の方がモラルが高いと解釈できることから、友人関係形成に対して脱近隣型の志向性を持っていると考えられる。

一方、グレーカラー層では、世帯収入が中程度以下の人では接触頻度とモラルの間にはあまり関

連が見られないものの、世帯収入が多い人では頻繁に接触する人の方がモラルが高かった。後者では近居していない友人を持つ人の方が多いことから、グレーカラー層では近隣の友人と接触している人は第2次的関係を結ぶことが多く、遠くの友人と接触している人は第1次的関係を結ぶことが多いと考えられる。

## 6. 4 世帯収入、就学期間、職業が友人関係におよぼす影響

次に本稿で検討した諸属性が友人関係におよぼす影響についてまとめる。世帯収入は男性において親しい友人の保有状況に影響をおよぼしていた。一方、就学期間の長さは男女共に親しい友人の配置状況に影響をおよぼしていた。

また、職業は男性においては親しい友人の保有状況、配置状況、友人関係における社会的距離に大きな影響をおよぼしており、労働に従事していた女性に対しても友人関係における社会的距離に対して影響をおよぼしていた。しかし、同じ職業に就いていても男性と女性では職業がおよぼす影響は同じではないことが同時に示唆された。

## 6. 5 都市居住高齢者の社会関係の特質

最後に、都市居住高齢者の社会関係の特質をまとめる。大都市居住高齢者は、社会関係が子供との関係を中心に縮小した存在ではない。女性は主に近隣の中で親しい友人を見だし、また男性はホワイトカラー層およびグレーカラー層では近隣という範囲を超えた友人関係を多く保持している。

このような大都市居住高齢者を対象として都市における社会関係の特質を「第1次的関係」「第2次的関係」を視点としてまとめると、「第1次的関係」と「第2次的関係」は主に職業と収入の影響下で並存していると結論できる。

### 注

- 1) この訳はPark (1929 (1986) : 35) に従った。
- 2) 岩井弘融 (1972) は、社会的距離とは「人間間の内面的な親密性の程度、つまり情緒的理解の親近・疎



速度を示す術語」であると定義している。

- 3) この調査を計画から御指導いただいた都立大学の諸先生方、桃山学院大学の木下栄二先生、上智大学の安藤究さん、また郵送回収作業を快く手伝って下さった都市研究センターの職員の方々、東京都立大学の大学院生および学部生の皆さん、上智大学S.A.Sの皆さんに記して感謝致します。
- 4) この項目に「わからない」と答えた人は台東区で18.2%目黒区では19.9%であり、老いに対する態度に属する5項目の中で最も高かった。なお他の項目に対して「わからない」と答えた人の比率を以下にあげる。
- Q1 台東区 8.8% 目黒区 9.9%  
 Q2 台東区 2.2% 目黒区 1.0%  
 Q3 台東区 3.6% 目黒区 5.5%  
 Q4 台東区 12.8% 目黒区 17.1%
- 5) 「別居子と電話」「別居子と会い会話」「兄弟親戚と電話」「兄弟親戚と会い会話」の4カテゴリーについて、各頻度に得点を与えたうえで合計し算出した得点である。
- 6) 「仕事仲間と個人的会話」「近所の人と会い会話」「友人知人と電話」「友人、知人と会い会話」の4カテゴリーについて、各頻度に得点を与えたうえで合計し算出した得点である。

## 文 献 一 覧

- アクセルロッド, M.  
 1978 「都市構造と集団参加」(鈴木広訳) 鈴木広編『都市化の社会学(増補)』誠信書房, pp. 211 - 221
- ホーヴォワール, S.  
 1959 『第二の性』(生島遼一訳) 5冊, 新潮文庫
- ボワセベン, J.  
 1986 『友達の友達』(岩上真珠・池岡義孝訳) 未来社
- Fischer C. S.,  
 1982 To Dwell Among Friends : Personal Networks in Town and City, University of Chicago Press.
- 藤崎宏子  
 1985 「老年期の社会的ネットワーク」
- 副田義也編『日本文化と老年世代』中央法規出版, pp. 89 - 148
- 岩井弘融  
 1972 『社会学原論』 弘文堂
- 古谷野亘  
 1983 「モラルに対する社会的活動の影響」『社会老年学』第17号, pp. 36 - 49
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男  
 1989 「PGCモラル・スケールの構造」『社会老年学』第29号, pp. 64 - 74
- Lawton M.P.,  
 1972 "The dimensions of morale," in Kent, D. P., Kastenbaum, R., and Sherwood, S. (Eds.), Research Planning and Action for the Elderly : The Power and Potential of Social Science Behavioral Publications.
- 1975 "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision," J.Gerontol.30, pp. 85 - 89.
- ミード, M.  
 1961 『男性と女性』(田中寿美子・加藤秀俊訳) 上下, 東京創元社
- 目黒依子  
 1987 『個人化する家族』 勁草書房
- 直井道子  
 1990 「都市居住高齢者の幸福感」『総合都市研究』第39号, pp. 149 - 159
- 岡村清子  
 1983 「中高年婦人の労働問題」袖井孝子・直井道子編『日本の中高年2 中高年女性学』垣内出版, pp.195 - 249
- パーク E.,  
 1978 「都市」(笹森秀雄訳) 鈴木広編『都市化の社会学』(増補) 誠信書房, pp. 57 - 96
- 1986 「社会的実験室としての都市」(町村敬志訳) 町村敬志、好井裕明編訳 お茶の水書房 pp. 11 - 35
- Park, E., W. Burgess  
 1969 "Introduction to the Science of Sociology : Including an Index to

- Basic Sociological Concepts”, University of Chicago Press  
 ジンメル G.,  
 1978 「大都市と心的生活」(松本通晴訳) 鈴木広編『都市化の社会学』(増補) 誠信書房, pp. 99-112  
 玉野和志・前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang,  
 1989 「日本の高齢者の社会的ネットワークについて」『社会老年学』第30号, pp. 27-36
- 和田修一  
 1980 「社会的老化と老化への適応」『社会老年学』第11号, pp. 3-14  
 Wellman B,  
 1979 “The Community Question: The Intimate Network of East Yorkers”, AJS 84 (5) pp. 1201-31  
 ワース L,  
 1978 「生活様式としてのアーバニズム」(高橋勇悦訳) 鈴木広編『都市化の社会学』(増補) 誠信書房, pp. 127-147

#### Key Words (キー・ワード)

Primary Relation (第1次的関係), Secondary Relation (第2次的関係), Social Distance (社会的距離), Urban Elderly (都市居住高齢者), Gender (性), Close Friend (親しい友人)

## SOCIAL RELATIONS OF THE URBAN ELDERLY

Tatsuto Asakawa\* and Yuetsu Takahashi\*\*

\*Graduate School of Social Science, Tokyo Metropolitan University

\*\*Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University

*Comprehensive Urban Studies*, No.45, 1992, pp. 69~95

This paper discusses the social relations of the urban elderly, while limiting the analysis and comments to non-kin relations.

Verification of my first hypothesis, that “non-kin relations greatly influence the subjective well-being of the elderly,” provides a general view of the social relations of the elderly living in cities. The result shows that men are influenced by close friends and women by neighbors and close friends, and these contacts help to change their attitudes toward their own aging. This fact also shows that the urban elderly, both male and female, are not beings whose social relations have been reduced to those that center around their own children. Accordingly, contact with close friends or neighbors had a substantial influence on their attitude formation.

Defining *primary relation* as relation of close social distance and *secondary relation* as relation of remote social distance, we hypothesized that “primary and secondary relations exist together; which of the two relations takes priority over the other depends on occupation, income and educational level.” Our inquiry showed that primary and secondary relations do exist together, mainly effected by occupation and income.

Through a third hypothesis, that “occupation influences the social relations of women, but this influence is different from that on men,” we studied the characteristics of social relation based on gender. The analysis occupation did not affect women as much as men. Still, it created a disparity in the social distance of friendships, different from what we found to be the case with men, though.